

氏名	中田 愛
学位の種類	博士（文学）
学位記の番号	甲第246号
学位授与年月日	2023（令和5）年3月20日
学位授与の要件	日本女子大学学位規程第5条第1項該当
学位論文題目	中世の鑿阿寺と東国社会
論文審査委員	主査 藤井雅子（史学専攻 教授） 副査 福田安典（日本文学専攻 教授） 古川元也（史学専攻 教授） 永村 眞（本学名誉教授） 江田郁夫（宇都宮短期大学 教授）

氏名 : 中田 愛  
学位論文題目 : 中世の鑿阿寺と東国社会

## 論文の内容の要旨

本論は、下野国足利庄にある鑿阿寺の歴史を明らかにするものである。鎌倉前期に同寺は本願足利義兼、開山理眞上人に建立された。同寺には約 600 通に及ぶ「鑿阿寺文書」が伝来する。本論はこれまで、主に武家研究に活用された本史料群を用いて、寺史を語った上で、各論を踏まえて、中世東国社会における鑿阿寺の位置づけを行った。

また同寺と鶴岡八幡宮寺の比較検討を行い、中世の東国寺院社会と武家社会の関係を考えることで、中世寺院史研究における本論の意義を示した。本論の章立ては、以下の通りである。

### 序章

#### 第一部 中世鑿阿寺の組織と経営

##### 第一章 中世鑿阿寺の寺内組織

##### 第二章 中世鑿阿寺の寺領経営

#### 第二部 中世の鑿阿寺と東国寺院

##### 第一章 中世の鑿阿寺と樺崎寺—「鑿阿寺樺崎縁起并仏事次第」を通して—

##### 第二章 南北朝期～戦国期の鶴岡八幡宮寺別当と鑿阿寺

#### 第三部 中世の鑿阿寺と武家社会

##### 第一章 南北朝期～室町中期の鑿阿寺と足利氏

##### 第二章 戦国期の鑿阿寺と足利氏—足利庄代官足利長尾氏との関係を踏まえて—

##### 第三章 戦国末期～江戸期の鑿阿寺と武家社会

### 終章

そこで本論の内容について、以下に略述する。

序章では、無年号文書が大半を占める「鑿阿寺文書」の年代比定を行い、発給年代や人物を分析した。その上で、従来の鑿阿寺研究を①寺内組織や経営、②寺領、③他寺との交流、④武家研究への活用に区分した。最も盛んに行われた④武家研究への活用では、鎌倉期～戦国期の足利氏や足利庄の動向、東国の政治情勢をはじめとする武家社会のあり方を明らかにする研究に端を発し、近年は戦国期の鑿阿寺と東国の足利氏（古河公方と堀越公方）の関係に着目した成果もある。しかし先述した鑿阿寺と東国の足利氏を扱った武家研究者の研究は、武家社会のあり方を解明するものであり、寺院に視座を据えたものではなかった。このような研究動向を踏まえ、寺内外の視点から鑿阿寺の検討を行った。

第一部「中世鑿阿寺の組織と経営」では、寺内組織と寺領経営を中心に扱った。

第一章「中世鑿阿寺の寺内組織」では、寺家法会や堂宇構造の変遷を通して、鑿阿寺の寺内組織のあり方を明らかにした。その上で、中世の鑿阿寺の役割について検討した。

鎌倉前期、鏝阿寺には足利氏の氏寺、足利庄の祈願寺という役割が期待された。鎌倉後期の家時の代には、霜月騒動前後の不安定な政治情勢を反映し、天下泰平の祈願を行う修正会が行われ、義兼忌日は一切経会を伴う盛大なものになる。さらに寺内では北条氏出身の義兼室忌日が同法会に次ぐ地位を得ており、北条氏の専制が加速する中で、同氏と良好な関係を保つことに腐心した足利氏の姿勢が寺家経営に影響を与えたことが窺えた。

鎌倉期の東西両堂に代わり、南北朝期に十二院が建立された。十二院は東西六院にわかれて仏事を勤修しており、東西両堂の流れを汲んで成立したと推測される。この内、寺内で主導的な立場にあったのは、西供僧の千手院であった。南北朝期以降、千手院が寺内で有力な位置を占めたのは、同院が西御堂の有力な供僧に建立されたためであろう。戦国期には、檀越古河公方に千手院の寺務代世襲が保障されており、その地位は揺らがなかった。

第二章「中世鏝阿寺の寺領経営」では、寺家経営の基盤となる寺領経営を扱った。鎌倉期の鏝阿寺の主な経営基盤は、足利庄内の諸郷の料足、足利氏の所領である上総国の末寺（上総堂・上総国足利堂）の上納、足利公文所を介して下される檀越の下行であり、その財源は足利氏の庇護で成り立っていた。

南北朝期以降、足利氏は鏝阿寺に多くの寺領を寄進し、鎌倉期以来続く足利庄の諸郷の料足の上納が継続する一方、寺家が直接支配する寺家直轄領が成立した。寺家直轄領の一つである武蔵国戸守郷の料足は、代官を在地の俗人から寺僧とすることで、寺家との関係の強化を図ったり、寺家や鶴岡八幡宮寺別当の仰せを仰いだりすることで、寺領の経営維持を図った。鏝阿寺領の料足は、院家に配分された後に寺財に転用され、共有の財産とされたため、寺家は一丸となり経営に当たったのである。

戦国期、鏝阿寺領の多くが経営困難に直面する中、古河公方に味方する東国諸氏が寺領の経営維持に奔走した。この武家の活動は、足利氏と鏝阿・樺崎両寺の繁栄を一体とする認識に支えられており、古河公方を支えるための宗教的な奉公と評価できよう。

第一部により、寺家経営が足利氏の政治動向の影響を受けたこと、同氏と密接な関係を構築することが、寺内で重要であったことが明らかになった。その一方、戦国期には足利氏の氏寺という鏝阿寺の役割は、同氏を主と仰ぐ武家の動向を規定したことは注目される。

第二部「中世の鏝阿寺と東国寺院」では、樺崎寺と鶴岡八幡宮寺との関係を検討した。

第一章「中世の鏝阿寺と樺崎寺―「鏝阿寺樺崎縁起并仏事次第」の成立を通して―」では、「鏝阿寺樺崎縁起并仏事次第」（以下「仏事次第」）の成立を通して、鏝阿寺と樺崎寺の関係を考察した。鎌倉期に鏝阿寺と一寺をなした廟所樺崎は、南北朝期に独立した後も同寺と密接な関係にあり、応永年間以降に鏝阿・樺崎両寺では、鎌倉公方の助力のもとに修造が行われた。

本史料は、永享中後期に鏝阿・樺崎両寺の修造料足不足に直面した寺務代宥雅が開始し、結城合戦終結から万寿王丸（鎌倉公方持氏の遺児、のち鎌倉公方成氏）の還御以前に完成したと思われる。完成した本史料は、鎌倉府の役人を介して、訴状と共に万寿王丸に進上され、檀越に鏝阿寺の重要性を再認識させる役割を果たした。

第二章「南北朝期～戦国期における鶴岡八幡宮寺別当と鏝阿寺」では、南北朝期に足利尊氏が鶴岡八幡宮寺別当による鏝阿寺寺務の兼帯を公認してから、戦国前期までの両寺の関係を考察した。鶴岡八幡宮寺別当が鏝阿寺寺務を兼帯した背景には、鎌倉期以来の足利氏の氏寺であった鏝阿寺を配下に治め、東国寺院社会における権威の維持を図る必要性に

加え、鑿阿寺領を掌握するという経済的要因があった。南北朝期、鑿阿寺領からの料足上納は困難を極めるが、室町中期の鶴岡八幡宮寺別当は、社家奉公人などの人的ネットワークを駆使することで、同寺領の料足上納の円滑化を図った。

戦国期には、古河公方方と室町将軍・関東管領上杉方の双方は異なる鶴岡八幡宮寺別当を擁立した。二人の鶴岡八幡宮寺別当は互いに合戦を優位に進めるべく、鑿阿寺に働きかけており、寺院の交流が政治的に活用されたことが窺えた。

第二部により、鎌倉期～戦国期には、鑿阿寺と他寺との関係に足利氏の意向が影響を与えたことが窺えた。その一方で、南北朝期の足利氏は同氏の氏寺という鑿阿寺の役割を保障しつつ、経済的な支援を行い、寺院に対して武家が敬意を払ったことが窺えた。

第三部「中世の鑿阿寺と武家社会」では、鑿阿寺と武家の関係を検討した。

第一章「南北朝期～室町中期の鑿阿寺と足利氏」では、都鄙の足利氏（室町将軍と鎌倉公方）と鑿阿寺の関係について比較検討を行った。南北朝期、足利尊氏は鎌倉期以来続く東国寺院社会の秩序を維持した。その一方、南北朝期以来の鑿阿寺の役割（足利氏の氏寺・足利庄と天下泰平の祈願寺）は保障された。その後、同寺は室町将軍と鎌倉公方双方の祈禱を続けたが、同寺の経営に深く関わったのは、足利庄の支配権を握る都鄙の足利氏であった。これは鎌倉期以来、鑿阿寺経営が足利庄経営と深く結びついたためであろう。

室町前期、足利庄が幕府の支配下に置かれた際、鑿阿寺経営に幕府方の代官が関わる一方、樺崎寺を拠点に鎌倉公方の意向を受けた鶴岡八幡宮寺が影響力を保持した。庄内が再び鎌倉公方方の支配下に入った直後に永享の乱が勃発するが、この際、鑿阿寺は都鄙の足利氏の祈禱を行った。

同寺は都鄙の足利氏を尊氏の子孫と捉えることで、室町将軍と鎌倉公方双方の護持を行う行為を正当化したが、当該期の都鄙の武家社会には、天皇の名の下に都鄙の足利氏が天下を統べているという認識があった。この室町将軍と鎌倉公方を天下を統べる共同体と考える共通認識のもとに、双方の護持を行う鑿阿寺の行為は容認された。

また幕府に公認された鎌倉公方持氏の遺児万寿丸には、鎌倉府の役人や鶴岡八幡宮寺別当を介して、鑿阿寺の巻数が進上されており、同寺の祈禱を受けることが、都鄙の足利氏の正当性を証明する一つ的手段であったと推測された。

第二章「戦国期の鑿阿寺と足利氏—足利庄代官足利長尾氏との関係を踏まえて—」では、戦国期の足利氏（古河公方・堀越公方・小弓公方）、足利長尾氏と鑿阿寺の関係を比較した。

享徳の乱の際、室町将軍・関東管領上杉氏方と古河公方が対立する中、足利氏の正当性が重要な問題となった。このような中、鑿阿寺は南北朝以来、都鄙の足利氏と足利庄代官に守られた先規を踏まえ、将軍・上杉氏方と古河公方の祈禱を行う一方、幕府方の足利庄代官足利長尾氏の祈禱を行ったが、同氏の所業で寺内が荒廃すると、公方に助けを求めた。

この乱の前後、古河公方成氏は禁制発給や寺領寄進を行い、息政氏は先規を保障した。永正の乱では政氏・息の高基（嫡子）・鶴岡八幡宮寺別当空然（高基弟）の三者が対立し、鶴岡八幡宮寺別当空然は還俗して小弓公方義明となり、〈古河公方—鶴岡八幡宮寺別当—鑿阿寺〉の密接な関係は終焉を迎えた。高基の代は、古河公方の禁制はなく、鑿阿寺が古河公方に先規の保障や禁制発給を求めた史料も残されていないが、これは当該期の古河公方家の混乱を示すものであろう。これと比して、庶流の地位が次第に確定した小弓公方と

鑿阿寺との関係は次第に疎遠となった。

しかし次代の古河公方晴氏やその息義氏に対して、鑿阿寺は創建以来の足利氏の氏寺・足利庄の祈願寺という役割や先例を盾に、庇護を得るべく働きかけた。また古河公方義氏と北条氏、藤氏（義氏庶兄）と上杉謙信方が対立した際に、双方の足利氏とそれに味方する武家は鑿阿寺の護持を受けることに腐心した。文明の和睦以降、足利長尾は寺家経営（院主職の相承・修造等）への関わりを深めた。これは鑿阿寺が先規を活用する一方、時流を踏まえ、他氏に働き掛ける柔軟性を有した組織であったためであろう。

第三章「戦国末期～江戸期の鑿阿寺と武家社会」では、戦国末期を乗り越え、江戸期に存続した経緯を検討した。義氏・氏姫の代、鑿阿寺は古河公方家の意向のもと、戦国大名武田氏や北条氏、足利長尾氏に禁制発給等を求めた。これは古河公方の祈願所鑿阿寺を尊ぶ武家社会の認識に支えられて実現したものである。

豊臣秀吉の小田原征伐後、徳川家康と関わりの深い千手院盛範が寺務学頭に就任した。江戸期の鑿阿寺は、天下泰平の祈願や徳川氏の追善を行うことで、徳川將軍家と結びついた。その後、盛範と共に、足利長尾氏の旧臣も同寺の修造に関与しており、戦国期以来の在地の関わりも維持された。また盛範の親族であり、足利一門を称する足利庄板倉出身の精矩が寺務学頭に就任し、渋川氏の祈願寺たる足利庄駒場の医王寺の寺務は鑿阿寺の兼帯となった。江戸前期の鑿阿寺は、創建以来の役割（足利氏の氏寺・足利庄との密接な関係・天下泰平の祈願寺）を活用することで、経営維持を図ったのである。

当該期の吉良氏は鎌倉期以来、鑿阿寺と密接な関係にある樺崎寺に縁起を納めた。その後、鑿阿寺は喜連川氏や岩松氏の寄進を受け、細川氏からは子息が入室した。さらに鑿阿寺は弘化年間には幕府の承認を受けて、源義国の七百回忌に伴う御免勅化を行い、諸国や喜連川氏・細川氏から助成を得たと思われる。

江戸期に鑿阿寺と樺崎寺を庇護した武家（徳川氏・渋川氏・喜連川氏・岩松氏・細川氏・吉良氏）は、義兼の祖父にあたる源義国の末裔に連なる一族を称した。江戸期の鑿阿寺は本願義兼の祖父義国の代まで供養の対象を広げることで、経営の存続を図ったのである。

第三部により、鑿阿寺は先例に倣うだけでなく、時流を見極めて、それを上手く読み替えることで、多くの武家の庇護を得ることに成功したことも明らかになった。

終章では、各論の成果をまとめた。鎌倉期の鑿阿寺の役割は、足利氏の氏寺、足利庄と天下泰平の祈願寺であった。南北朝期以降の鑿阿寺の地位は、鎌倉の権門寺院を凌ぐものではなかったが、旧来の役割が保障されたことで、都鄙の足利氏の護持を行うことが認められ、同氏を主家と仰ぐ武家やその庇護を受けようとする寺社にとって重要な寺院と認識された。戦国期に都鄙の足利氏の権威が失墜し、旧来の庇護が期待できなくなると、主体的に檀越に働きかけたり、他氏の護持を行ったりすることで、寺家経営の存続を図った。中世における鑿阿寺は、足利氏や武家との関わりに守られる一方、自らの役割を最大限に活用し、時流を見極めて主体的な判断を下し、他氏の庇護を得た。江戸期には、足利氏の氏寺・天下泰平の祈願寺を活用し、在地との関わりを維持する一方、源義国の末裔を称する武家の庇護を得ており、政治情勢を的確に見極め、主体的に働き掛けたり、柔軟的な判断が出来る主体的な組織であった。

最後に、本論の成果を相対化するため、鶴岡八幡宮寺と比較検討した。南北朝期以降、鶴岡八幡宮寺の動向は、武家社会に癒着した寺院が盛衰を共にした事例であり、武家社会

と寺院社会の関係は、通常は独自性や協調性を内包したものであることが窺えた。しかし戦国期に都鄙の足利氏の権威が失墜すると、寺院の護持に武家が喜捨で応えるという関係は崩壊し、中世社会を支えた武家社会と寺院社会は、共に衰退したという見通しを示した。

氏名：中田 愛  
学位論文題目：中世の鑿阿寺と東国社会

## 論文審査結果の要旨

上掲委員による審査委員会は、中田愛氏（以下、著者）より提出された博士学位申請論文「中世の鑿阿寺と東国社会」（以下、本論文）について審査し、以下のような結論を得たので、報告する。

### 論文の概要

本論文は、鎌倉時代前期に足利氏の氏寺として創建された真言宗寺院である下野国鑿阿寺が、鎌倉時代から江戸時代に至るまでの中世東国社会の混乱や足利氏の立場の盛衰の中で、如何に寺家を経営し存続してきたのかを明らかにしようとしたものである。

これまでの鑿阿寺研究は、武家社会との関わりに重点が置かれ、武家側に視座を置いたものが主であった。また「鑿阿寺文書」は、主に東国武士や、鎌倉公方・古河公方といった東国武士の動向を解明する個別研究において活用されてきた。その理由は、鑿阿寺が南北朝期より將軍となった足利氏の氏寺という立場に起因しており、また「鑿阿寺文書」に武家に関する文書が数多く含まれていることによる。こうした中で本論文は、これまでの東国武家社会、東国寺院と武家社会との関わり等の幅広い先行研究の成果を踏まえながら、さらに「鑿阿寺文書」の性格や内容を再度見直し活用することで、鑿阿寺の経営の歴史を通史的に解明した初めての専論である。特に鑿阿寺の存続に不可欠な寺領経営をめぐる武家社会との関わりについて、史料に基づいた詳細かつ緻密な検証を行ったものである。

本論文は、全文 314 ページ（A4 縦書き、原稿用紙換算で約 376,000 字）であり、構成は以下の通りである。

#### 序章

- 第一節 「鑿阿寺文書」の構成
- 第二節 「鑿阿寺文書」と先行研究
- 第三節 本論の目的
- 第四節 本論の構成
- 第五節 本論の語句の定義

#### 第一部 中世鑿阿寺の組織と経営

##### 第一章 中世鑿阿寺の寺内組織

- 第一節 堂宇と法会
- 第二節 寺僧集団と法会
- 第三節 経営組織

##### 第二章 中世鑿阿寺の寺領経営

- 第一節 鎌倉期の鑿阿寺経営と足利氏

第二節	南北朝～戦国期の寺領経営と寺財運用
第三節	戦国期の古河公方方の武家と寺領経営
第四節	戦国期の古河公方の氏寺鑿阿寺と武家
第二部	中世の鑿阿寺と東国寺院
第一章	中世の鑿阿寺と樺崎寺 — 「鑿阿寺樺崎縁起并仏事次第」を通して—
第一節	構成と性格
第二節	成立背景
第三節	野田氏と足利氏
第二章	南北朝期～戦国期の鶴岡八幡宮寺別当と鑿阿寺
第一節	鶴岡八幡宮寺別当と鑿阿・樺崎両寺領
第二節	鑿阿寺支配の変遷
第三節	二人の鶴岡八幡宮寺別当と鑿阿寺
第三部	中世の鑿阿寺と武家社会
第一章	南北朝期～室町中後期の鑿阿寺と足利氏
第一節	南北朝期の鑿阿寺と足利氏
第二節	鎌倉公方基氏期の鑿阿寺と足利氏
第三節	鎌倉公方氏満期の鑿阿寺と足利氏
第四節	鎌倉公方満兼期の鑿阿寺と足利氏
第五節	鎌倉公方持氏期の鑿阿寺と足利氏
第六節	鎌倉公方成氏と鑿阿寺
第二章	戦国期の鑿阿寺と足利氏—足利庄代官足利長尾氏との関係を踏まえて—
第一節	享徳の乱における鑿阿寺と都鄙の足利氏—古河公方成氏期—
第二節	永正の乱前後の鑿阿寺と古河公方・小弓公方—古河公方政氏・高基期—
第三節	鑿阿寺と古河公方晴氏
第四節	鑿阿寺と古河公方義氏
第五節	戦国期の鑿阿寺と足利長尾氏—長尾当長期を中心に—
第三章	戦国末期～江戸期の鑿阿寺と武家社会
第一節	古河公方義氏・氏姫期の鑿阿寺と戦国大名 —武田氏・北条氏との関係を中心に—
第二節	戦国末期～江戸期の鑿阿寺と徳川氏
第三節	江戸前期の鑿阿寺と渋川氏
第四節	江戸期の鑿阿寺と源義国の末裔
終章	
第一節	本論の内容—中世の鑿阿寺の役割—
第二節	中世東国における寺院社会と武家社会 —鑿阿寺と鶴岡八幡宮寺の比較を通して—
第三節	課題と展望

本論文は三部から構成され、これに序と結が加わる。そこで各部の要旨について論評を加えながら述べることにしたい。



「序章」では、鑿阿寺の開創から現在に至るまでの歴史を概観した上で、現在も鑿阿寺に所蔵される「鑿阿寺文書」全体の構成と分類および特徴、伝来について明らかにした。その結果、「鑿阿寺文書」には、寺内の様相を伝える史料が乏しい一方で、寺家経営に関わる足利氏関係の文書が多いこと、寺僧が発給した文書も数は少ないものの存在していることを指摘している。その上で、これまでの鑿阿寺に関する先行研究を整理し、「鑿阿寺文書」の新たな活用の可能性について検討し、「巻数」（祈祷成果に基づく護符）の活用を挙げた。そして本論文の目的としては、「鑿阿寺文書」を活用しながら、鑿阿寺の寺内組織や寺領経営を検討した上で、他寺や武家との関わりを考察し、最終的には中世東国における寺院社会と武家社会との関係について再検討を行うことを掲げた。

「第一部 中世鑿阿寺の組織と経営」の第一章においては、鎌倉時代～南北朝期における鑿阿寺の堂宇構成や寺院組織について、鑿阿寺の各堂宇で勤修される法会を通して明らかにした。足利義兼の持仏堂を前身とする鑿阿寺は、開創当初から義兼をはじめとする足利氏の忌日に追善を行い、足利氏の氏寺、足利庄の祈願寺としての役割を果たした。これに加えて、鎌倉後期になると北条氏との関わりの中で、天下泰平の祈願も行うようになったとする。尊氏が室町幕府を開くと、鑿阿寺の支配は鶴岡八幡宮寺別当によって行われるようになり、堂宇や組織、法会が再構成されたことが明らかにされた。そうした中で別当となった千手院の台頭や年行事の登場の背景に、政治情勢の変化や足利氏の関与があったことが解明された。第二章は鑿阿寺の寺領経営を検証したもので、特に寺内における法会の料足の運用や寺領経営を支えた武家との関わりに注目している。また南北朝期以降、足利氏から多くの寺領が寄進されたが、寺領を在地で管理する代官を寺僧とし、檀越の足利氏や古河公方に頼ることで、鑿阿寺は寺家一丸となって経営に当たったことを具体的に明らかにした点が評価される。

「第二部 中世の鑿阿寺と東国寺院」の第一章では、鑿阿寺とともに下野足利庄に所在し、同じ本願・開山を仰ぐ樺崎寺に関する史料として知られる「鑿阿寺樺崎縁起并仏事次第」に注目し、テキストとしての構成や性格等の分析を行った。特に足利氏の両寺に対する関わりや時代背景を押さえた上で、本史料の作成は永享中後期に着手され、結城合戦終結～万寿王丸（足利成氏）の還御以前（1440～1447）に完成したと推定した。作成の意図としては、応永年間に鎌倉公方足利満兼が両寺の修造を始めたものの、料足が不足したために、鑿阿寺の寺務代が鎌倉公方の支援を求めるためであったと言及した点は興味深い。第二章では、南北朝期から確認される〈古河公方—鶴岡八幡宮寺—鑿阿寺〉との関係の変遷のうち、特に鶴岡八幡宮寺別当による鑿阿寺支配の実態や関わりが具体的かつ詳細に明らかにされた。

「第三部 中世の鑿阿寺と武家社会」の第一章では、「鑿阿寺文書」に残される「巻数」等の宗教的性格を有する史料を活用しながら、都鄙（京都・鎌倉）の足利氏の対立期における鑿阿寺による双方への護持の実態を提示した。こうした鑿阿寺による祈祷の事例から、鑿阿寺は都鄙の足利氏に対して、寺領の寄進や安堵、寺領経営の維持を求めたとした。第二章では、東国の大乱とされる享徳の乱（1454～1482）とその後の戦国時代において、鑿阿寺が如何に各足利氏との関係を保ちながら、存続を目指したのかを検討した。特に鑿阿寺は都鄙の足利氏の祈祷を継続し関わりを持つことで、寺家経営を安定させようとした。しかし寺内が荒廃すると、鑿阿寺は古河公方を頼り、古河公方は寺領の濫妨狼藉を

禁ずる禁制を発給するなど、寺領経営の維持に尽力した。また足利長尾氏が地域権力として確立する過程が鑢阿寺との関係から浮き彫りとされた点も注目すべきである。第三章では、戦国末期から江戸時代において、檀越である足利氏や古河公方の衰退や在地支配の変容に際して、鑢阿寺が危機的状況を乗り越えたのかについて解明したが、鑢阿寺の戦国期・近世における研究はこれまでほとんど行われておらず、貴重な研究と位置づけられる。鑢阿寺は創建以来の役割である、足利氏の氏寺、足利庄・天下泰平の祈願寺としての立場を利用し、源義国の末裔を称する武家（徳川氏・喜連川氏等）の信仰と庇護を得て、経営維持を図ることができたことに言及した。

「終章」では、各部の整理とまとめを行った上で、鑢阿寺と共通点や関係の深い鶴岡八幡宮寺との比較を通して、東国寺院社会と武家社会とのあり方における鑢阿寺の特徴や共通点についての考察を行った。鶴岡八幡宮寺は、源氏の氏寺として創建されたが、南北朝期以降、室町幕府の置いた鎌倉公方との関わりを深め、特に同別当は都鄙の足利氏によって補任されたこともあり、不安定な政治権力との密接な関係は必ずしも寺院の繁栄をもたらさず、衰退を共にすることとなった。一方で鑢阿寺は都鄙の足利氏のみならず他氏の護持を行うことにより、時代の変化や権力者の交代に対応し、武家社会と協調性を持ちながらも、独立性を維持し、存続することができたことと結論づけた。そして本論文の成果として、東国寺院社会と武家社会との具体的な関係を示したことを挙げた。

## 審査の結果

審査は2022年12月17日に公開審査会（オンライン開催）で実施し、まず著者が論文の概要を説明し、質疑応答がなされた。

東国寺院に関する研究は、畿内寺院に比して、遅れているといわざるを得ない。その要因には、寺院史料が残されていないことや史料群の十分な活用が成されていないこともその一因と考えられる。そうした中で、本論文は、下野鑢阿寺所蔵の約六百通にも及ぶ「鑢阿寺文書」中を博搜し、内容の分類、無年号文書の年代比定を試みて、その活用を図り、史料読解に基づく論述を行った点が高く評価される。特に本論文において提示された「鑢阿寺文書」の特徴の分析は、鑢阿寺の歴史的変遷と一定の相関関係にあったものと考えられることから、今後の鑢阿寺研究や東国史研究の基礎となり得ると思われる。

また関係する中世東国社会および武家社会に関する幅広い先行研究を丹念にまとめ、その成果を継承し鑢阿寺研究に取り入れた点は、今後の東国史研究に大きく寄与するものと考えられる。さらに第二部で取り上げた「鑢阿寺権崎縁起并仏事次第」の成立過程に注目した点は、その史料的価値の評価を含めて重要な指摘との評価を得た。そして鑢阿寺の寺領経営については、個別寺領の検証や、多くの武家による押領や抗争が激化する過程、財源となる公事確保の様相をも丁寧に確認しており、その実態が実証的に明示されたといえる。なお本論文の一部は、『地方史研究』『歴史と文化』の学会誌に、査読付論文として3本の論文が掲載されており、東国研究史において高い評価を得ている。

一方で、審査委員会からいくつかの質問と指摘がなされた。第一に、鑢阿寺が果たした宗教的機能や役割について、十分に論証が成されたのかについて疑問が呈された。第二に、寺院組織をどのような視点から捉えようと考えているのか、経営組織論、寺内階層論

からの検討は不可欠であり、経営に関わる意思決定の組織などの解明についても必要であるとの意見が出された。第三に、檀越と鑿阿寺との関係が「外護と護持」という固定的な関係で論じられており、両者の関係について時代ごとの特異性が解明できたのかという問題点が指摘された。第四に、終章において比較対象とした鶴岡八幡宮寺以外に、日光山輪王寺と鎌倉との関係も検討に加えることで、本論文の意義がより鮮明になるのではないかという意見が出された。その他、一部の史料の成立や年代比定についての質問がなされ、慎重を期すべきとの助言が与えられたが、本論文の基本的な構成や方向性に疑問が及ぶことはなく、本論文の学術的な価値については、審査員一同異存のないところであった。

上記の審査結果を総合的に勘案した結果、審査委員会は全員一致で、本論文が博士論文としての学術的水準を十分に超えるものであり、博士（文学）の学位を授与するに値するものであると判断した。